

みちのり

田牧武司さん
1941年宮城県丸森町生まれ
兵庫県尼崎市在住。

父は召集されシベリアへ、母は幼い4人の子供を連れて逃避行、生き延びた2人と中国人の家庭へ



田牧 武司さん、尼崎日本語教室で
中国共産党が提唱した「盲運動（文盲をなくす運動）」で、52年に労働者、農民に識字を促し、学齢者は入学させる措置がとられ12歳になった田牧さんはやっと小学校1年生として学校へ通った。

3年前、尼崎教室へバラ組で学習に励んでおられるいつも明るく愛くるしい笑顔の田牧武司さん。田牧さんはコスモスの会の日本語教室だけでなく夜間中学校やYWCAにも通うなど、日本語学習にとっても熱心だ。

開拓団として満州へ
41年12月25日宮城県丸森町に生まれた田牧さんは、拉林開拓団として家族で北安省慶安（現・黒龍江省）へ入植した。終戦直前に父は根こそぎ動員で召集されてしまった。（その後シベリアに6年間抑留のち日本へ帰国した。）残された母は4人の子どもをかかえてソ連兵から必死で逃げた。その途中で田牧さんの弟はどこかへ預けられたのか行方不明、妹は発疹ができ収容所で亡くなった。

母は子供の命を守るため中国人と結婚した。田牧さんはそのころのことを次のように記憶している。「食べ物がないので、こっそりと畑に行き、トウモロコシを生そのままかじった。大雨が降っていた。母は幼い2人の子どもを何とか生き延びさせるために、慶安に戻り中国人と結婚した。そこは地主の家だったので、経済的には裕福だったが、とても厳しくしつけられた。

当時、ソ連兵が日本人を探しだすために各家を回って検閲していたので、家の中でも決して日本語をしゃべらないように言われていた。もちろん学校へも行けず、12歳まで家畜の世話をした。新しい家に来て半年ほどでなんとか中国語は話せるようになり、筆談でし

62、63年には飢きんで食べるものに困ったこともあったが、66年に知人の紹介で結婚し、5人の子どもが生まれた。97年に永住帰国したが、永住帰国したのは97年11月。帰国後は仙台に定住していたが、かの東日本大震災で被害を受け、2013年に尼崎へ移り住んだ。

そして尼崎市支援相談員である韓さんの力添えで、ここコスモスの会尼崎日本語教室で学び始めた。学習に対してとても意欲的で、大きな声で発表する姿はあどけない小学生のようでもあり、周りの人々を和ませてくれる。田牧さんの兄は1日も学校に行っておらず、べ物がかかると宿舎代がかかるとで中学1年生でやめさせられた。実は51年には土地改革で義父は財産をとりあげられていた。元地主だった者の中には、磔にされた鞭で打たれた者もいた。

戦後70年の昨年は戦争と戦争責任を問い直す企画が各地で行われ、中国残留日本人支援団体「コスモスの会」でも集いを開催しました。

映画に先立って中国残留日本人孤児（以下孤児という）たちの実体験に基づいた朗読劇「わたしたち、なににですか？」を上演しました。出演したのはバラ組学習者たちで、一世の孤児は体験を語り、二世は司会と孫役を演じました。数か月前から日本語教室の学習のかたわら、一生懸命練習しました。当日は大勢の参加者を前にして舞台上がり、はつきりとした日本語で堂々と読み上げました。会場の皆さんは、しんとして聴き入っていました。

続いて映画「望郷の鐘」孤児たちを帰国させる運動を一人ではじめた山本慈昭の物語で、満蒙開拓団のことがよく分る）を上映。涙して見ている人が多くいました。

映画終了後はすぐに「中国残留日本人」への理解を深める集い」



朗読劇を演じる学習者
「集い」の前日は多くの学習者やスタッフが会場設営を行い、当日には学習者、スタッフのみならず、多くの参加者の協力を得て「集い」が進められました。反省点はいくつかありましたが、ボランティアとしてこれから何が出来るかを改めて考えるよい機会となりました。

椅子を車座に寄せて参加者と孤児たちとの交流会を持ちました。そして体験談の続きや当時の中国の様子などの聞き取りを、意見交換の形で行いました。限られた時間の中で話には尽きませんでした。が、意義深い交流ができました。ロビーでは恒例の宗景氏の写真展示もありました。

アンケートも多数いただきました。「大変な苦勞をして生き抜いてきた孤児たちへのねぎらいと朗読劇への賞賛。長い間帰国の問題に背を向けていた国の責任の重さ。戦争の悲惨さ



写真展「開拓民」

交流の広場

- 主な行事**
- 6月20日 中国残留日本人への理解を深める集い
 - 10月20日 社会見学ツアー
- 文化教室**
- 6月13日 コープ食品工場見学
 - 6月21日 手芸・ポーチ作り
 - 7月5日 フラダンス
 - 9月27日 手芸・ストラップ
 - 10月31日 絵画教室
 - 11月29日 体操教室
 - 12月12日 生け花教室



社会見学ツアー（豊岡市但東町一宮神社境内、大兵庫開拓団遺族会の人たちと）



手芸教室（ポーチ作り）



体操教室



生け花教室の参加者と石井敏子先生（前列中央）



司会者の質問に答えて話す大中はつゑさん

厚生労働省主催のシンポジウム

大中はつゑさんが体験を話しました

11月14日京都市西文化会館ウエスティで、厚生労働省主催の「中国残留邦人等への理解を深めるシンポジウム」が開催されました。オープニング公演「吉林食堂」のあと、ジャーナリストの大谷昭宏さんの司会で、パネルディスカッションが行われ、中国残留日本人二世三世がそれぞれ自身の体験を話しました。大中は「終戦の2か月前に満州に渡り、7歳で残留孤児になった。厳しい労働など辛い体験は数多くあったが、一番辛かったことは、中国で全く教育を受けさせてもらえなかったことだ。そのため文字が読めなくて、社会の動きがよく分からなかった」と訴えられました。

「コスモスの会総会」

6月9日午後3時15分から5時までコスモスの会総会が尼崎市中央公民館視聴覚室で行われ、15年度の事業計画が確定しました。

（田村博志）

研修会が行われました

コスモスの会
ボランティア研修会

〈第1回目〉伊丹日本語教室代表の星さんが講演

5月19日、伊丹中国帰国者と交流する市民の会代表の星宏さんが講師となって、「私の体験と中国残留孤児への支援として、14歳で満蒙開拓青少年義勇軍に参加した体験」を話していただきました。

〈第2回目〉模擬授業

9月15日、牡丹グループスタッフの別当典子さんが模擬授業を行い、授業内容や教え方について話し合いました。

〈第3回目〉学習会

10月13日、バラグループスタッフの田中いづみさんに日本語授業にとつて大切な「コミュニケーション」についてお話をいただき、授業のあり方を皆で考えました。

（田村博志）

